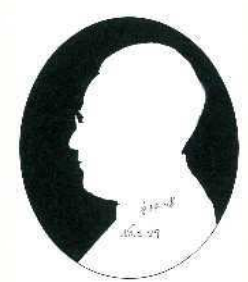


万年筆の旅



吉村昭 記念文学館

準備室ニユース

vol.6

平成28年3月31日発行
 登録番号(27)0108号
 編集・発行／荒川区
 問合せ／
 荒川区地域文化スポーツ部
 複合施設準備室
 〒116-8501
 東京都荒川区荒川2-2-3
 TEL.03-3802-4976

題字／津村節子氏
 切絵／山崎達郎氏

「ゆいの森あらかわ」の ロゴマークが決定しました

吉村昭記念文学館、図書館、子ども施設が融合する施設「ゆいの森あらかわ」のロゴマークを、区民投票の結果(19,315票)を参考に、選定委員会が審査を行い、左図のデザインに決定しました。



ゆいの森あらかわ
ロゴマーク

このロゴマークは、施設に融合する三つの機能を「樹木」と「本」で表現し、本の部分は、「ゆいの森」の頭文字である「Y」を表現しています。

ロゴマークは、施設の案内板やグッズ等に活用する予定です。

「ゆいの森あらかわ」は、平成29年3月末の開館を予定しています。

荒川区が制作した 証言記録映像が表彰されました

平成27年11月25日、吉村昭記念文学館の展示コンテンツとして制作した「北へ注がれる視線〜吉村昭と北海道〜」(制作委託先/毎日映画社)が、公益社団法人映像文化製作者連盟主催の「映文連アワード2015」※において、優秀企画賞を受賞しました。



受賞トロフィー

本映像は、吉村昭氏が小説の舞台として150回以上も訪れた北海道に焦点を当て、吉村氏の妻で作家の津村節子氏と元北海道立文学館副館長との対談をベースに、北海道との関わりから、吉村氏の作家としての歩みと人物像を紐解いたものです。

なお、本映像は、文学館開館後、常

日暮里図書館吉村昭コーナー ミニ展示のお知らせ

設展示室内で放映します。
 ※「映文連アワード」とは
 プロフェッショナルの仕事にふさわしい作品を発掘・顕彰することにより、短編集・映像界の活性化を図るとともに、次世代を担う新しい才能を発掘し、映像界のインキュベータとしての機能も担うことを目的に、平成19年に創設されたものです。

現在、日暮里図書館吉村昭コーナーでは、ミニ展示「資料からたどる吉村文学と災害―三陸海岸大津波」と「関東大震災」を開催しています。

本展は、全国文学館協議会第4回共同展示「3.11文学館からのメッセージ―天災地変と文学」の一環として開催するもので、自筆取材ノートや滞在メモのほか、吉村氏が収集した参考資料の一部をパネルで展示しています。

期間 平成29年1月31日(火)まで
 (予定)

開館時間 火曜から金曜・午前9時30分から午後7時30分まで、土曜、日曜、祝日、臨時開館日：午



日暮里図書館
吉村昭コーナー ミニ展示の様子 (一部)

前9時30分から午後5時まで
 ・休館日 月曜、第3木曜、特別整理期間、年末年始
 ・会場 日暮里図書館2階吉村昭コーナー

※詳細は、区ホームページをご覧ください。

(http://www.city.arakawa.tokyo.jp/arapura/yuinomoriarakawa/tenji-event/index.html)

なお、本号4ページの著作紹介第4回では、「関東大震災」を取り上げています。

吉村昭の足跡をたずねて



吉村昭と長崎

吉村昭は、小説の証言や資料を求めて全国各地を旅しました。北は北海道から南は沖縄まで、時には海外にも赴きました。吉村の足跡をたどると、作品の舞台地、調査で訪れた地、通いつめた店、文学碑の建立地など、諸所にゆかりの地が存在します。

そこで今回は、吉村の名を世に知らしめた作品「戦艦武蔵」が、本年度で刊行50年の節目を迎えたことを記念して、その舞台地である長崎と吉村のつながりを紹介します。

歴史小説の中でも殊に幕末や海洋に関心を寄せてきた吉村は、長崎を題材にして多くの作品を遺しました。吉村は「長崎が奥深い歴史を秘めた町であるから当然のこと、別に驚くにはあたらない。私は、いつの間にか長崎に魅せられ、長崎ほど素晴らしい町はない、と思うようになった」と綴っています。

一方で、吉村は、旅に出るといい酒と食べ物に巡りあうことを最大の楽しみにしていました。長崎は「食べ物が無類にうまい上に人情がことのほか篤く、私は、長崎へ行って常にも快い気分」で帰途につくと語っています。長崎に魅せられた背景には、こうしたその土地ならではの食べ物や心を通わせた人びとの存在がありました（「七十五度目の長崎行き」）。七十五度目の長崎行き「河出書房新社、平成25年」。本稿では、調査の様子やその地での様々な出会いを通して、吉村が見つめた長崎を紐解きます。

吉村昭と「戦艦武蔵」

昭和30年代後半、吉村は知人の作家から、長崎造船所で建造された戦艦「武蔵」をテーマに執筆を勧められ、建造に携わった技師への取材を経て、雑誌「プロモート」に「戦艦武蔵」取材日記（No.20、24、日本工房、昭和41年3月〜同42年5月）を発表しました。これを読んだ「新潮」編集長が小説化を促し、吉村は改めて、「武蔵」関係者の証言を収集するために、昭和41年（1966）3月、初めて長崎を訪れました。約一週間の滞在期間中、建造技師や関係者への取材、資料調査を重ね、同年9月、長篇「戦艦武蔵」（新潮）第63巻第9号、新潮社）を発表しました。同月、単行本化されると、瞬く間にベストセラーとなり、本作によって作家としての地位と、証言や資料を用いた執筆方法を確立しました。

現在、長崎造船所の史料館には、吉村が書き出した「戦艦武蔵」を伝えるコーナーが設置されています。武蔵の取材ノート（複製）や遺愛品をはじめ、写真や著作本など多数の資料が展示されています【写真1】。

長崎での資料調査

吉村は「戦艦武蔵」の調査以降、歴史小説の資料収集のために、頻りに長崎を訪れるようになりました。資料調査は、主として長崎県立長崎図書館郷土資料閲覧研究室で行われました。当時の館長らに、執筆に必要な資料を問い合わせ、様々な文献を提示してもらいました。その親切な対応や専門性の高さに、



【写真1】長崎造船所史料館の吉村昭コーナー（一部）

吉村昭が私を知って、30年ほど前、長崎県立図書館で資料調査、夜は思案橋で舌鼓を打つ、というのがいつものコースだった。

吉村 昭

【写真2】長崎図書館の芳名録。日中は図書館で資料調査、夜は思案橋で舌鼓を打つ、というのがいつものコースだった。

「図書館におさめられている書物、未整理の資料はもとより、その地方にどのような資料があるかを知悉していた。私の求めがなんであるかも敏感に察して、即座に指示してくれた。私には、氏そのものが図書館に思えた」と驚嘆した様子を綴っています（「図書館」私の引出し「文藝春秋」、平成5年）。長崎を舞台にした数々の作品は、こうした図書館との出会いによって創り出されていきました【写真2】。

長崎奉行

長崎図書館長は、吉村が来訪した回数を記録していました。ある時、館長から「今回で六十五回目だ」と告げられた吉村は、それ以来長崎に行く度に回数を日程表に記入するようになりました。

それを伝え聞いた長崎県庁が、来訪100回記念として吉村に講演を依頼し（平成10年2月20日、長崎県文化講演会「長崎と小説家としての私」）、その際県知事から、「長崎奉行」に任命されました。任命証として「長崎奉行」と描かれた波佐見焼の陶板が贈呈され【写真

3、「寝台列車で初めて長崎に来た折のことを想い、陶板を手に感慨無量」であったと振り返っています（長崎奉行のこと）「わたしの普段着」新潮社、平成20年。

吉村昭が愛した長崎の味「皿うどん」

吉村は、長崎に到着すると必ず向かう場所がありました。長崎市新地街にある中華屋「福寿」です。ここで大好きな皿うどんを食べてから調査に出かけるというのがお決まりのスタイルでした。

福寿の皿うどんは、麺を揚げて具をかけた細麺タイプと、具と麺と一緒に炒めた太麺タイプ【写真4】の二種類があり、吉村は後者を好んで食べました。随筆「長崎の味」で「皿うどんをひと箸、口に入れた瞬間、ひどく幸せな気分になる。長崎に来てよかつ



【写真3】高田勇県知事から任命証「長崎奉行」を授与された吉村。平成10年2月20日撮影。（津村節子氏蔵）



【写真4】福寿の太麺皿うどん



【写真5】額装された直筆原稿「長崎の味」（福寿蔵）



【写真6】マツヤ万年筆病院

たな、と胸の中でつぶやく。また、これほどうまい食物は珍しい、とも思つて語っています（長崎の味）「わたしの流儀」新潮社、平成13年。

「長崎の味」を読んだ店主は、「ああ本当に心から愛してくださったんだな」と、嬉しさで感謝の気持ちが入り込んできたといいます。同作の自筆原稿は吉村没後、妻で作家の津村節子氏が福寿に贈り、額装されて、現在も大切に保管されています【写真5】。

愛用の万年筆を求めて

吉村は、小説や随筆はもとより、日常的な書簡、日記に至るまで万年筆を利用していました。それは執筆対象によって使い分けるほどのこだわりようで、短篇はオリジナル万年筆、長篇はパーカー、原稿の推敲はパイロット、清書や書簡などは外国製万年筆、サインは筆ペン型万年筆を愛用していました。

吉村が初めて万年筆を手にしたのは、中学校に入学した時でした。お祝いにもらった万年筆を「制服の上衣の胸ポケットにはさんだ時の嬉しさは忘れられない。それまで鉛筆しか使わなかった自分

が、一格も二格も位があがったような誇らしさであった。それ以後、私は万年筆を使いつづけている」と記しています（万年筆の葬送）「縁起のいい客」文藝春秋、平成18年。

吉村は初め、デパートの万年筆売り場で購入していましたが、次第に専門店を求めるようになりました。そして、長崎市浜町に店を構える「マツヤ万年筆病院」と出会ってからは、ここで買うのが常となりました【写真6】。

マツヤ万年筆病院は、昭和24年4月、万年筆の小売業と修理の専門店として開業しました。店主は代々続く万年筆職人の三代目で、初代は日本の万年筆黎明期を支えたスワン万年筆やモナーク万年筆の技術者でした。三代目店主もこうした環境の中で万年筆の製造技術を磨きました。

吉村は、「修理もすずんです」という店であることを知り、足を踏み入れました。「店主は長年の研究で自信をいだいているが、謙虚な人柄で、いつの間にかかれのすすめにしたがつて万年筆を買うようになり、その書き味に私は満足している。ようやく私は、気に入った万年筆店を見出したのである」と綴っています（私と万年筆「LAWSON」No.8、毎日新聞社、平成6年）。吉村は、三代目店主を「万年筆の神様」と敬愛し、店を出る際には「万年筆の神様」と唱え、拍手を打っていったといえます。

吉村昭記念文学館常設展示では、「仮（ひとり旅）のコーナーで、長崎を紹介する予定です。自筆原稿や創作ノートなどを通して、長崎を舞台にした作品世界に迫ります。

「長崎を舞台にした主な作品」

『暁の旅人』、『アメリカ彦蔵』、『海の祭礼』、『島抜け』、『戦艦武蔵』、『長英逃亡』、『ニコライ遭難』、『磔』、『ふおん・しいほるとの娘』、『落日の哀 勘定奉行川路聖謨』

※五十音順

著作紹介
第4回

『関東大震災』



【関東大震災】
(文藝春秋(単行本)、昭和48年)
吉村昭コレクション

私の両親は、東京で関東大震災に遭い、幼時から両親の体験談になじんだ。殊に私は、両親の口からもれる人心の混乱に戦慄した。そうした災害時の人間に対する恐怖感が、私に筆をとらせた最大の動機である。

(「あとがき」『関東大震災』文藝春秋、平成16年新装版)

関東大震災を書く 大正12年(1923)9月1日、午前11時58分、関東地方南部に大激震が発生。家屋倒壊とともに、瞬時に拡大した火災は、広大な面積を焼失させ、この災害において最大の犠牲者を出しました。未曾有の事態に錯乱した人びとの心は、「流言」を生み出し、凄惨な社会事件を引き起こします。災害被害が人災を誘発した関東大震災は、関東一帯を中心に日本の自然災害史上、最も甚大な被害を及ぼしました。

吉村は、少年時代から震災への意識を深めていました。日暮里町(現荒川区東日暮里六丁目)で震災に遭遇した両親が語る体験は、日常の教えとして心に

刻まれたのです。やがて、関東大震災の実態を自ら確かめ、書く決意をした吉村は、膨大な文献資料の調査と、丹念な証言収集、緻密な検証作業を経て連載を開始します(「諸君」4巻5号、5巻6号、文藝春秋、昭和47年5月、同48年6月)。関東大震災から50年が経過した昭和48年(1973)には、単行本として発表し、その真相を伝えました。同年、『戦艦武蔵』(新潮社、昭和41年)から本作までのドキュメント作品において、第21回菊池寛賞を受賞しました。

証言収集と記録の検証 執筆にあたり、吉村が力を注いだのは、証言収集でした。火災と大旋風により、人も馬も荷車も飛ばされ、惨状を極めた本所区横網町の被服廠跡地と、逃げ遅れた芸妓たちが、炎に巻かれた浅草区吉原公園。この2か所の生存者を中心に、取材を繰り返しました。証言から証言へと、それぞれの異なる体験と感情を紡ぎだす、冷静かつ客観的な筆致は、災害の全体像を生々しく立ち上がらせています。

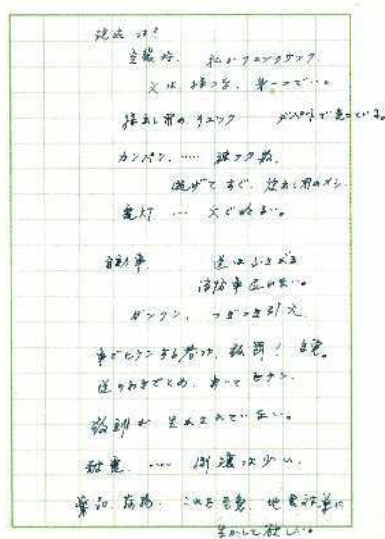
震災と時代 全十九章からなる本作では、「第二の悲劇—人心の錯乱」と付された章に、最もページを費やしています。大災害に直面し、恐怖と不安を募らせた人びとの「異常心理」は、全く根拠のない津波や余震に関する「流言」を作り出しました。通信機関の混乱、不安定な政情など、様々な要因が絡むことで社会性を強めた「流言」は、「巨大な怪物」に成長し、自警団による殺戮、社会主義者の弾圧や虐殺といった深刻な社会事件に発展しました。吉村は、徹底した資料調査により、この「悲劇」の過程を克明に描き出しています。

また、「歴史の流れの中で起るべくして起った事件」と分析。明治維新から大正後期の日本社会に蓄積された「様々な矛盾」が、一気に露呈した災害と捉え、震災を書くことで、大正時代の日本の姿を追究しました(「関東大震災ノート—その歴史の意味」『万年筆の旅(作家のノートII)』文藝春秋、昭和61年)。

難時の荷物が火災を広げることを幾度も警告しています。本作末尾において、地震学者たちの奮闘を綴る一方、「地震の予知」が困難であることを滲ませた吉村。執筆により得た防災の見識を、現代の生活形態に照らし、著作や対談、講演で語り続けました。吉原公園から上野公園までの避難に「五時間もかかった」という証言は、「避難場所の選定に大きな教訓になる」と述べています(「上野と関東大震災」『うえの』第34号、上野のれん会、昭和62年)。

また、「関東大震災の東京市における悲劇は、避難者の持ち出した家財によるものであったと断言している」と鋭く指摘。道路確保のため、荷物や大八車を取り締まった江戸時代の教訓が生かされず、逃げ場や消防活動が遮られ、凄まじい火災被害となった地域の詳細を明らかにしました。そして、理学博士中村清二の調査報告に基づき、最大の発火原因は薬品の落下であること、避

さらに、震災から70年後の講演「小説『関東大震災』を書いて」では、災害時「いちばん危くする」ものとして、ガソリンが入った自動車や、道をふさぎ、引火の危険性があると説きました(「大都市震災対策シンポジウム、平成5年」)。吉村は、執筆後の思いを「関東大震災」と題して原稿用紙に書き留めています。当時の被害状況を隔々まで記録し、防災意識や社会状況を顧みて「薬品、荷物、これを至急、地震対策に生かして欲しい。」と結びました。その言葉からは、震災を過ぎ去ったものとせず、教訓に学び、防災対策を実施する重要性を訴えた吉村の姿勢が窺えます(「写真」)。



【写真】自筆メモ「関東大震災」(吉村昭コレクション) 下から4行目「教訓が生かされていない」とある。末尾の「至急、地震対策に生かして欲しい。」という一文に強い思いが宿る。

余すところなく震災の実状を著し、時代に潜む問題と人間の本質を浮き彫りにした本作は、現代社会を生きる私たち一人ひとりに、絶えず警鐘を鳴らしています。
(文学館準備担当学芸員 深見美希)

「吉村昭コレクション」とは、夫人である津村節子氏から荒川区にご寄託いただいた吉村昭氏旧蔵資料のことです。